

#### 4 「月に架かる二輪の薔薇よ」

お屋敷に住んでいたのは一人の貴婦人  
大きな瞳 背が高く華奢な<sup>からだ</sup>肢体  
真昼からずっと歌をうたい続けていた  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

馬にのってやってきたのは一人の騎士 5  
雨も降らない早春のころ  
真昼にうたう貴婦人の歌声を耳にした  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

だが騎士は少しも立ち止まることなく 10  
速駆けでお屋敷の前を通り過ぎ  
真昼にうたう貴婦人の歌声を後にした  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

<sup>いくさ</sup>戦はすでにはじまり  
緋色と藍色の両軍が待ち構えていたから  
あくる日の暖かな真昼まで騎士は拍車をかけ続けた 15  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

<sup>いくさ</sup>戦は丘から丘へと広がった  
こちらの風車からあちらの水車まで  
真昼に近づくころ 騎士は誰にもなく呟いた  
「月に架かる二輪の薔薇よ」 20

<sup>こんじき</sup>金色の兜も<sup>ぐんか</sup>軍靴も  
緋色と藍色に飲み込まれた  
真昼に戦が激しくなると 騎士は叫んだ  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

群れ集まる緋色と藍色の槍の中を 25  
<sup>こんじき</sup>金色の軍旗が突き進んだ  
真昼に敵を討ち果たすと <sup>みな</sup>皆は叫んだ  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

土砂降りの雨も厭わず  
騎士は再びお屋敷に駆け戻り 30  
真昼に熱い口づけをした  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

さんざし もと  
山査子もとの下で娘は冠を授かった  
輝くばかりの純金の冠だった  
真昼のお屋敷で角笛が高らかに鳴った 35  
「月に架かる二輪の薔薇よ」

(福山真季・原由子寄稿)